

## 成人看護学領域における実習指導者の指導観

堀 理江・大塚 眞代

### 抄 録

本研究の目的は、実習指導者の指導観を明らかにすることである。A大学の成人看護学領域の実習を担う実習指導者3名を対象に、実習指導に関する半構成的面接を行い、面接内容を質問項目ごとに質的に分析した。

その結果、学生を指導する上で大切にしていることは、【モデルとなるよう行動する】【学生の思考を尊重する】【学生が安全に援助を行うために調整する】【学生の周囲との関係性に配慮する】【患者理解を助ける】【患者の安全・安寧を守る】【適切な最終目標が達成できるように導く】【患者中心の看護であることを強調する】の8つのカテゴリから構成されていた。実習指導者としての姿勢では、【学生のありのままを受け入れる】【自己をコントロールすることの重要性を伝える】【謙虚さ】の3つのカテゴリから構成され、実習環境の調整は、【他職種・スタッフに協力を依頼する】【実習指導の方向性を統一する】【教員と相談しながら関わる】の3つのカテゴリから構成されていた。実習指導者の喜びは、【学生がヒューマンケアリングを実践している】【学生の懸命な姿勢】の2つのカテゴリから構成され、葛藤・課題は【看護師であり実習指導者であることの葛藤】【実習指導を担当する看護師の不足】【学生の技術実践の機会の減少】【多職種協働の中での看護の役割を見出す】の4つのカテゴリから構成されていた。これら20カテゴリのうち、14カテゴリは、指導観を形成する3つの要因としてまとめることができた。3つの要因は、『倫理的な態度を維持する』『コーチング』『患者の経験に焦点を当てる』であった。

キーワード：臨地実習、実習指導者、指導観

### I. 緒言

看護基礎教育において、臨地実習は、講義を臨地の現象と結び付けて考える貴重な場であり、臨地実習そのものが「授業」として位置づけられている<sup>1)</sup>。

臨地実習には、実習施設、臨地実習指導者（以下、実習指導者とする）、教員など様々な要素が影響している。実習の教育課程全体に責任をもつのは教員であるが、臨地実習においては実習指導者の協力が重要となる。実習指導者は、学生の学習意欲、患者と学生の関係性へ影響を与える存在であり、臨地実習における重要な要素と位置づけることができる。しかしながら、臨地実習に関する研究は増加傾向にある一方で、教員や学生を対象としたものが多くを占め、実習指導者を対象としたもの、あるいは実習指導者と教員の協働に関する事柄を対象とした研究は非常に少ない<sup>2) 3) 4)</sup>。

実習指導者と教員の協働に影響する実習指導者の要因に関する研究によると、実習指導者が看護師としての役割を認識していることが、協働に影響することが明らか

かになっている。その役割の内容として、実習指導者が「ロールモデルを示すこと」、「学生の意志を尊重した関わりをもつこと」だと述べられている<sup>5)</sup>。また、特定の部署が、異なる教育課程数を受け入れることが、指導者の不安でもあり協働を阻む要因の一つでもあること<sup>6)</sup>が明らかになっている。さらに、実習指導者は、協働に関して、学生への対応や指導方法など、教員の関与を求めていること<sup>7)</sup>が明らかになっている。これらのことから、実習指導者は、様々な課題や不安をもちながら実習指導に臨んでいることが推測され、実習指導者である看護師が、指導についてどのように考えているかを明らかにすることは、今後の実習指導体制を検討する上で有用であると考えられる。

教員と実習指導者が担う役割、実習指導者が指導にあたって抱える課題や困難等は概観されてはいるが、その役割や課題・困難は実習施設や大学、実習目標の在り方によって固有のものがあると考えられる。そこで、本研究では、A大学の成人看護学領域における臨地実習に関わる実習指導者の実習方法に関する意識を明らかにすることを目的とした。

Rie Hori  
Mayo Ootuka  
関西福祉大学看護学部

## II. 研究目的

本研究の目的は、成人看護学領域における実習指導者の指導観を明らかにすることである。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究において、指導観とは、佐藤が述べている指導観の定義<sup>8)</sup>に基づき、「教材観、学生観を基盤にし、指導面でとくに意図することやその指導の価値についての考え方」とした。

### 2. 研究参加者

研究参加者は、A大学看護学部の3年次後期に履修する成人看護学領域の臨地実習である「療養生活援助実習I」あるいは「治療・回復過程援助実習」の実習指導を行った経験があり、本研究の主旨に同意した看護師3名である。

### 3. データ収集方法

研究参加者に対して、インタビューガイドを用いた半構成的面接を行った。面接は、実習指導者が勤務する施設内の個室で行い、面接内容はICレコーダに録音し、逐語録とした。

面接内容は、実習指導者の年齢等の基本的属性についてのデータを得た後、学生を指導する上で大切にしていること、実習環境の調整などについて面接を行った。なお、インタビューガイドは、研究者が実習指導者に関する文献をレビューした内容を基に考案した。

面接は、平成25年2月から4月に行った。

### 4. 分析方法

分析は、逐語録を精読し、インタビューガイドの項目毎に、指導面でとくに意図することやその指導の価値についての考え方に関連する内容を抽出し、コードとした。それぞれのコードについて、類似性にしたがって類型化し、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した。

分析にあたっては、研究者間で合意が得られるまで討議し、信頼性の確保に努めた。

### 5. 倫理的配慮

本研究は、A大学倫理委員会による審査を受け、以下のことに配慮し、承認を得た。

研究の実施にあたり、施設の看護部の長に研究の主旨について文書及び口頭で説明し、承諾を得た。研究参加者にも、研究の概要、研究への参加は自由意思によるものであり、研究参加の可否は管理者に知られることはないこと、途中辞退が可能であること、プライバシーの保護、研究内容は学会等で発表する可能性があることについて文書を用いて口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得たこととした。

## IV. 研究結果

### 1. 研究参加者の背景

実習指導者3名は、看護師経験年数は3名共に10年以上であり、実習指導経験年数は2～3年であった。全員が女性であり、看護協会主催の実習指導者研修会等を受講していた。職位は主任が1名、スタッフが2名で、実習指導に専任で臨んでいるものが2名、専任あるいは兼任で臨んでいるものが1名であった。面接時間は46～65分であった(表2)。

### 2. 実習指導者の指導観

研究参加者が語った内容を、インタビューガイドの項目毎に分析した。なお、カテゴリは【 】、サブカテゴリは《 》、コードは“ ”で表す。

表1 インタビューガイドの項目



表2 研究参加者の概要

	看護師 経験年数	実習指導 経験年数	性別	他施設での勤 務経験	指導者講習受 講の有無	実習指導 体制	職位	面接時間 (分)
A	10	3	女	無	有	専任	スタッフ	60
B	18	3	女	有	有	専任	主任	65
C	13	2	女	有	有	専任/兼任	スタッフ	46

1) 学生を指導する上で大切にしていること  
 学生を指導する上で大切にしていることは、8カテゴリ、19サブカテゴリから構成されていた(表3)。

8つのカテゴリは、【モデルとなるよう行動する】【学生の思考を尊重する】【学生が安全に援助を行うために調整する】【学生の周囲との関係性に配慮する】【患者理解

表3 学生を指導する上で大切にしていること

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
モデルとなるよう行動する	着実に援助する	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本をきちっと教えようということは心がけている</li> <li>一つひとつ(の援助)をきちっと、ちゃんと、ゆっくりやっていく</li> <li>普段よりゆっくり目にする</li> </ul>
	患者を尊重する姿勢を示す	<ul style="list-style-type: none"> <li>敬語というか、どうしても馴れ合いになって喋っているところもあるので、そういうところは注意はしようと思っています</li> <li>言葉遣いが学生に真似されて困る言葉遣いはなるべくその時はしないように</li> <li>言葉遣いが結構きついで、言葉の、声のかけ方はすごく気を付けるようにしてはしてる</li> <li>声かけとか姿勢とか、姿勢というか、患者さんにどの位置から関わるかとかそこを見てほしい</li> <li>ちゃんと(患者に)声をかけて、当たり前のことで「患者さんと向き合ってますよ」っていうことをちゃんと提示はするようにしてます</li> </ul>
学生の思考を尊重する	行動や思考の根拠を問う	<ul style="list-style-type: none"> <li>どういう思いでこうしたいかということ、ちゃんと聞かなあかん</li> <li>何でこれ(看護計画)を立てたかとか、なぜこれをしたいかとか、その辺の理由が私はちょっと聞きたい</li> </ul>
	自ら考え行動するプロセスを重視する	<ul style="list-style-type: none"> <li>「どう思う?」と声をかける</li> <li>最初はできるだけ見守る</li> <li>こうあるべきっていうのを取って大らかに考えられるようにはしてる</li> <li>答えを言わないようには心がけている</li> </ul>
学生が安全に援助を行うために調整する	振り返りを促す	<ul style="list-style-type: none"> <li>どういうところに注意しながらやったのか後で確認する</li> <li>後の振り返りをする</li> <li>学生と患者の様子を覗き、援助と一緒に入り、何が原因かを探る</li> </ul>
	観察の仕方に配慮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>監視されている気がするので、遠巻きでは見ない</li> <li>技術的なところでチェックしたい時はこっそり覗く</li> </ul>
	すぐにサポートできる距離を保つ	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者さんの顔が見える位置にいるようにはしてる。手際によってすぐ隣に立って声かけながらやるか、少し離れて見てるかですね</li> </ul>
学生の周囲との関係性に配慮する	準備状況を確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>準備がちゃんとできてるかどうかってところから</li> <li>始める前の声かけがどうかとか、実際の手技よりも患者さんの顔を見てるかとか</li> <li>焦らすと学生はパニックになるので、物品の準備など(時間の)短縮できることを短縮する</li> </ul>
	学生への指導内容が周囲に知られないよう配慮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>カンファレンスとかになって、全体のことでみんな話し合いになるから、なるべくその時に言ってあげた方がいいのかな</li> <li>カンファレンスの場で全体の話として言うだとか、準備室で二人になったときに言うとか</li> <li>あまり周りに注意されているというか、指導されているっていうのが伝わり過ぎないように</li> </ul>
	学生と患者との関係性に配慮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者さんがいる前だと、あんまりきつく言うと(患者と学生の)関係が壊れたら困る</li> <li>指導に関しては、よほど危険じゃない限りは一旦終わって(患者の部屋から)出てから。その場で(注意)したほうが学生には響くのかなとは思ってますけど</li> </ul>
患者理解を助ける	学生がリラックスできる雰囲気を作る	<ul style="list-style-type: none"> <li>なるべく声をかけられやすいようにはしてます</li> <li>かなり自分が緊張するので、どうしても口調もきつくなるし、早口にもなるので、笑顔を心がけている</li> </ul>
	患者の思いを患者の言葉で聴かせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>(患者に)患者の反応を言葉として出してもらえよう関わる</li> <li>患者の声を聴いてもらいたい</li> <li>患者が実際どう思っているか、その時の生の声として聴いた方が、学生の胸にも響くと思う</li> </ul>
患者の安全・安寧を守る	患者に配慮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者の表情を見て大丈夫か判断しながら再度学生が実践することを患者に伝える</li> <li>学生と指導者が一緒に関わっていることを患者にはっきり示すため、近くで見る</li> <li>学生は技術(の実践)に時間がかかることを患者に伝える</li> <li>「一通りこういうことをします」っていうことだけ言って、後、やり方を見てもらう。患者さんの前で説明すると、嫌がる方もいらっしゃるんで</li> <li>患者さんが嫌そうな顔というか、そういう表情が出たらすぐに(援助を)止めます</li> </ul>
	患者の安全を守る	<ul style="list-style-type: none"> <li>感染のことについても学生にちゃんとその都度の説明</li> <li>安全管理と感染管理</li> <li>一番最初の時に、患者さんの危険がない限りは、安全が守れるのであれば何してもらってもいいっていうことは必ず提示させてもらって</li> </ul>
適切な最終目標が達成できるように導く	最終目標の達成に向けて短期目標を設定する	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな目標の中で、それに向けての小目標をっていうようには声掛けするようにはしてる</li> <li>計画に沿った日々の計画が挙がってるのかなっていうのを、気にはなる</li> </ul>
	目標設定が適切であるよう指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>ずれた目標設定をしたときには、「この目標ではどうかな」と投げかけ、振り返れるよう訂正する</li> </ul>
	継続看護の視点で指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習が終わってからも続けられるようなプランを立ててもらおうよという話を一応最初にする</li> </ul>
患者中心の看護であることを強調する	患者の目標設定だということを強調する	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者さんのあくまで目標なんですよっていうことは言う</li> <li>援助の時間はつらくないか考えさせる、患者と相談するよう返す</li> <li>患者のニーズに目を向けさせる</li> </ul>
	患者のニーズに目を向けさせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>この人の一番困ってることは何番目とかそのへんは聞いて</li> </ul>

解を助ける】【患者の安全・安寧を守る】【適切な最終目標が達成できるように導く】【患者中心の看護であることを強調する】であった。

実習指導者は、実習目標を念頭に置きつつ、自分自身の行動がモデルとなるよう、《着実に援助する》こと、《患者を尊重する姿勢を示す》ことを普段よりも意識しながら、実習指導に臨んでいた。そして、実習指導者は、《行動や思考の根拠を問う》《振り返りを促す》ことをとおして《自ら考え行動するプロセスを重視する》ことを大切にしていた。また、患者に援助を提供する際には、《準備状況を確認する》《すぐにサポートできる距離を保つ》ことを行いながら、“監視されている気がする”ので、遠巻きでは見ない”、“こっそりチェックする”など、《観察の仕方に配慮する》姿勢が見られた。学生間の関係、学生と患者の関係にも配慮し、《学生への指導内容が周囲に知られないよう配慮する》などしていた。さらに、実習指導者は【患者理解を助ける】ために、“患者の声を聴いてもらいたい”、“患者が実際どう思っているか、その時の生の声として聴いた方が、学生の胸にも響くと思う”という思いから、実習指導者が患者の思いを代弁するのではなく、《患者の思いを患者の声で聴かせる》ことを重視していた。

また、実習指導者は看護師として、《患者に配慮する》《患者の安全を守る》ことで、【患者の安全・安寧を守る】ことを優先していた。

## 2) 実習指導者としての姿勢

指導者の姿勢は、3カテゴリ、6サブカテゴリから構成されていた(表4)。

3つのカテゴリは、【学生のありのままを受け入れる】【自己をコントロールすることの重要性を伝える】【謙虚

さ】であった。

実習指導者は、“学生を先入観をもって見ないこと、見ちゃいけない”と《学生をありのままに見ること》を意識し、《学生が好き》という思いを抱きながら《学生の変化に気づく》ために、学生を注意深く見ていた。また、専門職として重要なことを享受するために、《健康管理の重要性を伝える》《自己の感情をコントロールする必要性を伝える》ことを行っていた。

## 3) 実習環境の調整

実習環境の調整は、3カテゴリ、8サブカテゴリから構成されていた(表5)。

3つのカテゴリは、【他職種・スタッフに協力を依頼する】【実習指導の方向性を統一する】【教員と相談しながら関わる】であった。

実習指導者は、《スタッフの特性を把握》し、《スタッフの協力を感謝する》ことをしながら、《スタッフに協力を依頼する》ようにしていた。また、《スタッフ間で学生の情報共有をする》こと、《学生がスタッフに看護計画を伝える》ことをとおして、【実習指導の方向性を統一】していた。《教員との連携の重要性を理解》し、《教員を信頼》《教員に相談》しながら実習指導していた。

## 4) 実習指導をしていて喜びを感じたこと

実習指導をしていて喜びを感じたことは、2カテゴリ、4サブカテゴリから構成されていた(表6)。

2つのカテゴリは、【学生がヒューマンケアリングを実践している】【学生の懸命な姿勢】であった。

実習指導者は、実習をとおして《学生が人間の成長について理解する》場面に遭遇したり、《学生が患者と良好な関係を築いている》ことを実感したりしたときに実

表4 実習指導者としての姿勢

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
学生のありのままを受け入れる	学生をありのまま見る	・学生を先入観をもって見ないこと、見ちゃいけない ・学生を信じること、その子の人生を信じる ・その子の存在自体を認めてあげたい
	学生が好き	・どんな学生さんであれ大好き ・感じたことを素直に表現する、青年ゆえの反応が大好き ・チャンスを逃さないよう、自分の中でアンテナを張るようにしている
	学生の変化に気づく	・(学生の) 歩き方がいつもと違うことを察知する ・感情を内に秘めた学生だと思い、言葉として聞き出すようにした
自己をコントロールすることの重要性を伝える	健康管理の重要性を伝える	・自分の健康管理も大事やなって。学生さんにはずっと言うんだけど。
	自己の感情をコントロールする必要性を伝える	・自分たち(学生間)の人間関係のことで患者さんに迷惑かけてほしくないと思う
謙虚さ	謙虚な姿勢で協力する	・「謙虚な姿勢で先生たちから学べ」と管理者に言われた ・病院全体で(実習指導に協力する)って言われていることが浸透しているのかなって思う

表5 実習環境の調整

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
他職種・スタッフに協力を依頼する	スタッフの特性を把握する	・中には正当なこと言うんですけどちょっときついスタッフもいるので、ちょっとそこは（気に掛けるようにしている）
	スタッフに協力を依頼する	・担当の看護師、プライマリーの看護師にこういう計画でこういうことをしているのでフォローをしてほしいと頼んでみることもあります ・看護スタッフだけでなくリハスタッフもいるので、そこに担当者をつかまえて行って、学生の話聴いてほしいってお願いをしたり
	スタッフの協りに感謝する	・スタッフの人が協力してくれてどれだけ忙しくても耳を傾けてくれているので、助かっている
実習指導の方向性を統一する	スタッフ間で学生の情報共有をする	・連絡事項なことだけはメモで、ノートでしてたり ・気になったところ、指導の視点など、学生個々の情報を伝えている ・連絡ノートを作っている
	学生がスタッフに計画を伝える	・パンフレット、何かが出来てきたっていうたら、なるべくみんなの前で発表して、これ活用していきたいと言うこととかはその場で報告させてもらう ・病院全体で（実習指導に協力する）って言われてることが浸透してるのかなって思う
教員と相談しながら関わる	教員との連携の重要性を理解している	・学生が迷わないよう、教員との垣根を取って、お互い協力していく指導の大切さを研修で学んだ ・教員や指導者が学生に密着して関わることで、学生の軌道修正ができる
	教員に相談する	・教員、指導者のどちらかが、全体的な流れがわかれば、学生の変化に気づける ・その時（相談したいことがある時）の第1選択はたぶん教員の方になって。その後にはほかの病棟の実習指導者に相談して、どう実習を進めていくかだとか
	教員を信頼する	・教員とは話しやすい。信頼しているので、安心して甘えられる ・教員とは、同じところを見て同じ感性で話ができるので、すごく嬉しい

表6 実習指導をしていて喜びを感じたこと

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
学生がヒューマンケアリングを実践している	学生が人間の成長について理解する	・「どの発達段階でも（患者は）成長するんだっていうことが理解できました」みたいなこと言うって
	学生が患者と良好な関係を築いている	・コミュニケーションで悩んでいた学生が、患者とよい人間関係を築いて話をしている瞬間
学生の懸命な姿勢	学生のモチベーションが向上している	・今までで一番頑張ってますって本人が言ったのはホッとしました ・実習の最初と最後とで学生の反応や意欲が変化している時
	看護の初心を教えられる	・看護としての、初心みたいなものを教えてもらっている。瞬間垣間見れるっていうのが嬉しい

習指導の喜びを感じていた。また、時間の経過とともに《学生のモチベーションが向上している》ことを実感したり、《看護の初心を教えられる》という体験をとおして、学生の懸命さに喜びを感じていた。

#### 5) 実習指導の葛藤・課題

実習指導の葛藤・課題は、4カテゴリ、5サブカテゴリから構成されていた（表7）。

4つのカテゴリは、【看護師であり実習指導者であることの葛藤】【実習指導を担当する看護師の不足】【学生の技術実践の機会の減少】【多職種協働の中での看護の役割を見出す】であった。

実習指導者は、施設に所属する看護師でありながら、他施設の学生を指導するという立場にあり、《病棟の業務との兼ね合い》や《学生と患者との関係性の悪化》の間で、何を優先すべきか迷っていた。また、《同じ立場の相談相手がいない》ことで、“どう対処していいんか

分からへん”と感じていた。さらに、《学生が体験できる内容の制約》が、学生の技術実践の機会を奪っていることにも葛藤を抱いていた。多職種協働については、リハビリスタッフなどの《他職種の説明を学生がそのまま看護計画に結びつける》場面があり、多職種協働の中での看護の役割を見出し伝えることが課題だと捉えていた。

#### 6) 実習指導者の指導観

インタビューガイドに沿って質問した結果から導き出された20カテゴリのうち、14カテゴリは、指導観を形成する3つの要因としてまとめることができた（表8）。その結果、実習指導者の指導観には『倫理的な態度を維持する』『コーチング』『患者の経験に焦点を当てる』の3つの要因があることが見出された。

表7 実習指導の葛藤・課題

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
看護師であり実習指導者であることの葛藤	学生と患者との関係性の悪化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(患者選定の) 設定してからそういうこと(患者と学生のトラブル)があったときに変更というのんがすごい(葛藤)</li> <li>・学生さんに(患者が)きつく当たってる時のちゃんとした仲介とかもできてたかなとか</li> <li>・(高次脳機能障害で) コミュニケーションの取り方がすごく難しい方がたまにいるので</li> </ul>
	病棟の業務との兼ね合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生しか見ていなかった。それではだめ。業務が成り立ってこそ。そこの葛藤がすごくある</li> <li>・指導したいことも、人や組織によって考え方が違うので、組織に属する以上はそこに従っていかなくちゃいけない</li> <li>・時間的な余裕によって、学生との関わる時間や振り返りに差がある</li> </ul>
実習指導を担当する看護師の不足	同じ立場の相談相手がいない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長い間、丸々2年くらいはずっと一人でやって来たので、自分のモデルがなくなって、どう対処しているか分からへんかって</li> <li>・カリキュラムとか、今どきの学生さんが分からないとかいう時に、誰に言ったらいいのかなっていうのはあります</li> </ul>
学生の技術実践の機会の減少	学生が体験できる内容の制約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床出てきてしか体験できないことをできるだけ体験してほしいがいろんな規制や制約がある。一人の判断でできない</li> <li>・結局(血糖測定の実施等、看護技術の実施の) その機会自体が少なくなったり</li> <li>・危ないから、移乗とかこっち(看護師)がすると、(学生は)移乗の勉強がなかなかできひんかなと思ったり</li> </ul>
多職種協働の中での看護の役割を見出す	他職種の説明を学生がそのまま看護計画に結び付ける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リハビリスタッフの説明が詳しくすぎて、その意見が学生のプランに流れてしまう。そこに看護師の視点っていうのはまだちょっと追いつかない</li> </ul>

表8 指導観を形成する要因

要因	カテゴリ
倫理的な態度を維持する	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の思考を尊重する</li> <li>患者の安全・安寧を守る</li> <li>学生のありのままを受け入れる</li> <li>自己をコントロールすることの重要性を教える</li> <li>謙虚さ</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な最終目標が達成できるように導く</li> <li>モデルとなるよう行動する</li> <li>学生が安全に援助を行うために調整する</li> </ul>
コーチング	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生と周囲との関係性に配慮する</li> <li>他職種・スタッフに協力を依頼する</li> <li>実習の方向性を統一する</li> <li>教員と相談しながら関わる</li> </ul>
患者の経験に焦点を当てる	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者中心の看護であることを強調する</li> <li>患者理解を助ける</li> </ul>

## V. 考察

### 1. 実習指導者の指導観

#### 1) 倫理的な態度を維持する

実習指導者は、看護師として【患者の安全・安楽を守る】ことを優先しながら、専門職として【自己をコントロールすることの重要性を教える】よう学生に関わっている姿勢が見出された。また、実習指導者が、【学生のありのままを受け入れる】【学生の思考を尊重する】ことによって、学生を一人の人間として尊重していることが明らかになった。

実習指導者が、看護者であり、同時に指導者であることは多くの文献で述べられており、患者の安全と学生の

学習のバランスを取りながら、実習指導に臨むことの重要性が明らかにされている<sup>9) 10)</sup>。このことは、本研究で、実習指導者が、看護師として患者の安全を守りながら、学生の学習、さらには専門職としての姿勢まで教授しようとする姿勢と一致する。さらに、実習指導者は、効果的な教授となるよう、学生を一人の人間として尊重していることが明らかになった。

#### 2) コーチング

実習指導者は、【適切な最終目標が達成できるように導く】ために、【学生が安全に援助を行うために調整する】【他職種・スタッフに協力を依頼する】【教員と相談しながら関わる】など【実習の方向性を統一する】よう行動していた。また、学生に一方向的に看護援助を行わせるのではなく、【モデルとなるよう行動する】ことも行っていた。

Bevis<sup>11)</sup>は、行動主義・経験主義のパラダイムでは、学生の看護援助の判断や、考え方、学識などが軽視される傾向にあり、成果のみで評価を行う問題点があると述べている。そして、学生の自主性を尊重する教育的ケアリングの考え方を示している。実習指導者は、学生を実習指導者の考える看護援助の枠に当てはめることなく、学生の気づきを促したり、実習しやすい環境を整えたりすることでコーチングしていた。特に、実習しやすい環境を整えるための、教員との連携について、先行研究で

は教員との連携の困難について述べられおり<sup>12)</sup> <sup>13)</sup>、本研究で明らかになった、「教員との連携の必要性を理解し、教員を信頼し、相談する」という実習指導者の姿勢は、本研究に特徴的であり、今後も現在の関係性を継続していくことの重要性が示唆された。

### 3) 患者の経験に焦点を当てる

実習指導者は、【患者中心の看護であることを強調する】【患者理解を助ける】ことで、患者の経験に焦点を当てようとしていた。特に、【患者理解を助ける】ために、《患者の思いを患者の言葉で聴かせる》ことは、本研究に特徴的な内容であった。Kleinman<sup>14)</sup> は、病いは経験であり、経験について知るためには、物語りをつうじて、病いの経験にかかわる必要があることを強調している。

研究参加者は3名共に慢性期病棟に勤務している。慢性期にある患者の症状は非常に多様であり、たとえ同様の症状を呈しているも、その症状の体験は個人によって異なる。《患者の思いを患者の言葉で聴かせる》という実習指導者の指導方法は、慢性期の患者を対象に10年以上看護してきた経験に基づくものであると推測され、慢性期病棟の実習指導者に特徴的な指導観である可能性が高いことが示唆された。

### 2. 実習指導者としての経験

実習指導者は、実習指導を行う過程で、様々な喜びや葛藤を経験していることが明らかになった。

本研究では実習指導者の喜びとして、【学生がヒューマンケアリングを実践している】【学生の懸命な姿勢】が明らかになった。岩月らによる、臨地実習における教育と臨床の協働に関する研究では、実習指導者および教員は、学生の姿勢に初心を思い出したり、学生のかかわりによって患者が良い方向に変化していくことに喜びを感じたりしていることが明らかになった。実習指導者が、実習指導の過程で、学生と患者との関係性や学生の姿勢に喜びを感じていることは先行研究の結果と一致していた。

また、本研究で明らかになった《同じ立場の相談相手がない》という葛藤は、下田が実習指導者の自信のなさへの影響因子として明らかにした『指導に対する評価の不足』<sup>15)</sup> や、福井らが臨床実習指導者の抱える困難として明らかにした『実習指導に自信がもてない』『指導方法に自信がもてない』<sup>12)</sup> と同様の内容であった。実習指導者が、実習指導方法について相談する相手の存在、実習指導評価の機会等の環境整備が必要であることが示

唆された。

### 3. 研究の限界と課題

本研究の研究参加者は、実習指導経験年数が3年以下と比較的短い。指導経験が浅い間は、自己の実習指導方法について振り返ったり、他者に相談したりする機会が多い可能性が高く、実習指導経験年数が長い指導者の指導観とは異なることも考えられる。

また、研究参加者が3名と少ないことから、成人看護学領域における実習指導者全体の特徴を表しているかどうかは明らかではなく、今後も実習指導者への面接を継続して行っていく必要性が示唆された。

## VI. 結論

1. 実習指導者が、学生を指導する上で大切にしていることには、【モデルとなるよう行動する】【学生の思考を尊重する】【学生が安全に援助を行うために調整する】【学生の周囲との関係性に配慮する】【患者理解を助ける】【患者の安全・安寧を守る】【適切な最終目標が達成できるように導く】【患者中心の看護であることを強調する】の8つのカテゴリがあった。
2. 実習指導者の、指導者としての姿勢には、【学生のありのままを受け入れる】【自己をコントロールすることの重要性を伝える】【謙虚さ】の3つのカテゴリがあった。
3. 実習指導者が行う実習環境の調整には、【他職種・スタッフに協力を依頼する】【実習指導の方向性を統一する】【教員と相談しながら関わる】の3つのカテゴリがあった。
4. 実習指導者が、実習指導をしていて喜びを感じたことは、【学生がヒューマンケアリングを実践している】【学生の懸命な姿勢】の2つのカテゴリであった。また、実習指導者の葛藤・課題には、【看護師であり実習指導者であることの葛藤】【実習指導を担当する看護師の不足】【学生の技術実践の機会の減少】【多職種協働の中での看護の役割を見出す】の4つのカテゴリがあった。
5. 実習指導者の指導観は、『倫理的な態度を維持する』『コーチング』『患者の経験に焦点を当てる』の3つの要因から形成されていた。

## 謝辞

本研究に当たり、インタビューにご協力くださいました実習指導者の皆さまに心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 杉森みど里, 舟島なをみ:看護教育学第4版, 医学書院, 東京, 2004.
- 2) 阿部オリエ:看護学実習における評価に関する文献検討, 日本赤十字九州国際看護大学IRR第7号, 51-56, 2009.
- 3) 宮崎美砂子, 井出成美, 小川三重子, 山岸春江, 平山朝子:臨地実習における教員と現地指導者の役割明確化のための一事例分析, 千葉大学看護学部紀要, 19巻, 155-161, 1997.
- 4) 椎葉美千代, 齋藤ひさ子, 福澤雪子:看護学実習における実習指導者と教員の協同に影響する要因, 産業医科大学雑誌, 32巻2号, 161-176, 2010.
- 5) 治田祐子, 米田恭子, 内田有香, 他:臨地実習における看護師の役割とその実態, 第43回日本看護学会論文集 看護教育, 118-121, 2013.
- 6) 椎葉美千代, 齋藤ひさ子, 福澤雪子:看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因, 産業医科大学雑誌, 32巻2号, 161-176, 2010.
- 7) 大高恵美, 佐藤サツ子, 佐藤美恵子:療養型医療施設における臨地実習指導の現状と課題-初めて実習指導を行った臨地実習指導者と病棟管理者の面接調査より-, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第10号, 39-47, 2005.
- 8) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子:看護教育における授業設計(第4版), 50-54, 医学書院, 東京, 2009.
- 9) 薄井坦子:Module方式による看護方法実習書(改訂版), 現代社, 1990.
- 10) 栗原保子:臨床実習指導の構造に関する研究, 千葉看護学会誌, 7巻1号, 59-66, 2001.
- 11) Em Olivia Bevis, Jean Watson(1989)/安酸史子(1999):ケアリングカリキュラム-看護教育の新しいパラダイム-, 199-251, 医学書院, 東京.
- 12) 福井美貴, 末安民生, 野末聖香:精神看護学における臨床実習指導者の抱える困難-大学教育に焦点を当てて-, 日本精神保健看護学会誌, 14巻1号, 88-97, 2005.
- 13) 堤かおり, 糸井裕子, 河村圭子:成人看護学実習における教員と看護師間の指導一貫性に関する一考察, 兵庫大学論集, 第12号, 233-237, 2007.
- 14) Arthur Kleinman(1988)/江口重幸, 五木田紳, 上野豪志(1996):病いの語り-慢性の病いをめぐる臨床人類学-, 4-37, 誠信書房, 東京.
- 15) 下田美和:臨床実習指導者が漠然と感じる自信のなさの要因と影響因子に関する研究, 神奈川県立看護教育大学校紀要, 26巻, 27-35, 2003.
- 16) Patricia, B., Molly, S., Victoria, L., et al. (2010)/早野ZITO真佐子(2011):ナースを育てる, 医学書院, 東京.